環境デザインとしての風水説

文学部　山田　利明

キーワード：風水、自然、都市、森林、龍脈

一般的には風水説というと、部屋の壁やカーテンの色を変えることで、幸運を招き、災厄から逃れる方法という見方がかなり定着している。しかしながら、本来の風水説は墓地や宅地の選定、都城や邑里の択地に用いられた土地の選別法であって、その土地の持つ地気の良否を鑑定した。その意味では卜地方、いわゆる Geomancy の部類に入るが、それは単なる土地占いではなく、土地の持つ気を観るという点で、独自の展開を示したといえる。

一体、気という概念は、一般的にはそのものを形成する根元のエネルギーといわれる。そのものを形作るというのは、例えば A という人についていえば、その A という人の肉体や精神、個性や能力をも含めて、A という人全体、この場合にはその人の持つ雰囲気、風体をも含めた人品をも指す。それは人間だけではなく、山や川、森やそれを構成する一本の樹木、岩石や器物にまで及ぶ。およそ、この世界に存在するあらゆるもの（万物）が持つ、そのものを形成する力である。

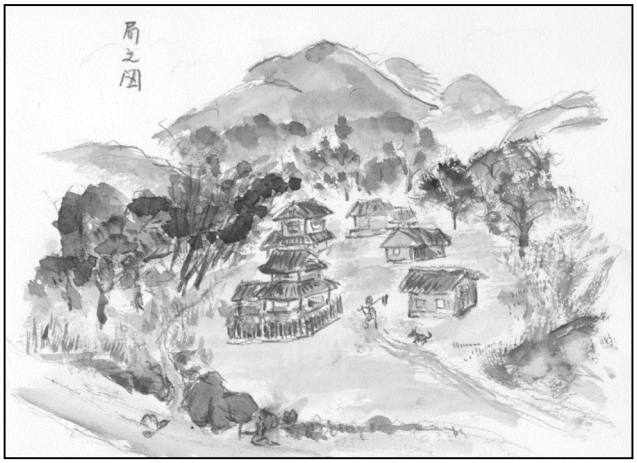
実体論としての気の解釈は、以上のような理解がほぼ漢代頃に定着している。その後、哲学論としての気論が展開されるが、風水説そのものの基盤に大きな影響を与えることはなかった。しかし、その理論の中には時々の気論がとり入れられて、現在の風水説が形成されている。その現在の風水説の基礎となっているのが、明代に書かれた『地理人子須知』である。この書は 16 世紀の中頃に徐善継・徐善述という二人によって記され、主に墓地の選定を論じている。後に述べる風水という用語が示される初期の文献『葬書』も、墓地の選定に関わる書であることを考えると、死者の陰宅と生者の陽宅は同一の機能を持った。

ここでは気論の展開を論ずるわけではなく、一般的な風水説の理解に従って、環境形成、とくに住宅や都市のあり方を中心に考えてみようと思う。

I

風水説の基盤にある気の思想は、大地の気の流れ、これを龍脈といい、西域の崑崙山を起点として二ないし三本の幹線となって中国を貫流し、それぞれの幹線から支流が枝分かれしてくまなく全土を流れる。ただし、全土を均一に流れるのではなく、地域によって地気の強弱良否が生ずる。強い地気の流れ、あるいは地気が瘤のように溜まったところなど

が良地とされる。とくに地気の溜まったところを穴（ケツ）といい、風水説上の強い地気を持った良地をして重視される。これは、人体を流れる気の思想に基づく考え方で、気の溜まる部位を気穴すなわちツボと称することとパラレルになる。要するに、人体の気の流れをそのまま中国の大地におき換えたもので、漢代に興った大宇宙たる自然界と小宇宙たる人体が相互に関連するという思想（天人相感説）にもとづく。



この大地のツボである穴は、およそ北側に比較的高い山があり、東西は北側よりも低い山・丘陵、南は広く開けた平野に河川や湖沼などがある地形として姿を現わす。北側や東西の山には森林が広がり、岩山であってはならない。これが大規模な穴を持った大地の表情であり、その規模の大小によって、都市や村落、あるいは個人の住宅を建てれば、地気の作用によって、その都市や集落、あるいは家は永く繁栄して不朽という。この穴を中心にした山や森林の配置を総称して局とよぶ。

最も古い風水書とされる『葬書』(『葬経』) は、その名の通り墓地の選定にかかわる書で、四世紀初期の郭璞によって書かれたとされる。これは祖先信仰から出た択地法であって、祖先を地気の勝れた土地に葬ることで、祖先の加護を受け一家繁栄・家門隆盛の福を得る方法である。そこに描かれた地気旺盛な良地は、前記の宅地・都市の良地と同じ地形を持つ。

このように見ると、風水というのは大地の相を観る方法で、地相術とでも称すべき方法であることが分かる。人相・手相など小宇宙である人間の状態を観察するのと同様、大宇宙の大地の相、つまり地相を観察する方法である。

大宇宙の自然界と小宇宙の人体を流れる気は、同じ大気である。この大気の中には、人間や動物の生命を維持する何かが含まれている。その何かが人や万物を形成する根元となっている。元気とはこのことである。気には二つの種類がある。一つは陽の気でもう一つは陰の気である。これはごく初期の生成論である陰陽説にもとづく。万物を陰と陽とから形成されるものと考え、陰と陽のエッセンスである陰気・陽気の配合によってその性質が作られるとするもの。陰は月・女・地・冷・弱・柔などの性をもち、陽は太陽・男・天・温・剛などの性を持つ。その後、万物の形成については、もう少し複雑な元素が想定され、木・火・土・金・水の五つの元素（五行）が考えられた。すなわち木のエッセンスたる木気であり、火のエッセンスである火気、地のエッセンス土気、金属のエッセンス金気に水のエッセンス水気である。この五行は、季節や時間・物質・臓器・色などあらゆる現象や感覚・器物などに配当される。

木－青－春－朝－東

火－赤－夏－昼－南

土－黄－土用－日中－中央
金－白－秋－夕－西
水－黒－冬－夜－北

このような五行の気によって配される方向と色彩、材質などを一軒の家や部屋に適応させて、気の調和を図るのが、今日的な風水説となっている。要はしかし、適正な気の流れを作ることであるから、必ずしも色彩や材質が関わるとは思えない。五行もその配色や方向も、思想として顕われたもので科学ではない。

さて、地中に気が流れるのかといえば、科学的には全くナンセンスな見解である。しかし、この気をそのもののもつ活力として解釈すれば、大地の持つ総合的な地力、それは農耕だけに適するものではなく、都市や宅地としても、それに相応しい環境と風土を備えた土地ということになる。三方を山や丘陵、あるいは森林で囲まれ、南側に湖沼や河川のある開けた土地と言えば、通常は山地のふもとに開かれた盆地状の土地を想起することになる。あるいは扇状地として開かれた地域ということになる。盆地状となると、気候的には厳しいが外敵からの防御、独立性・独自性の維持という点で優れた効果を持つ。扇状地では、その地質にもよるが大方は肥沃な地味が広がる。こうした状況も一つの地力であり地気として解釈できよう。

科学的には龍脈も穴も存在しない。これは風水説という思想に基づく大地の解釈であって、科学ではない。従って地気説を科学的に論じてもあまり効果のある方法とはいえない。しかし、この方法によってかつての中国人が都市を築き、宅地を開発したことは事実であって、その中には多くの経験知や科学で分析しきれない感性などが潜められている。ここで論じるのは、その経験の集積であり、感性のあり方であって、それを環境論としてとらえて、風水的デザインを考えてみたい。その意味において、上述した景観としての風水説の良地は、この思想の特徴をよく示すものと言える。それは第一に、山・丘陵と森林、そして水沢の重視にある。これはこの三者が相互に関連をもって存在することを暗に示したもので、しかもこれらが人間の生活に不可欠の環境を提供することを明らかにしている。第二には、方向に対する心理である。北に山岳、南に平地と水沢の配置は、明るさと温かさ、暗さと寒さの対比であり、心理と体感の表現といえる。生活レベルでいえば、水と食料（農耕と狩猟と魚漁）と木材（住宅と燃料）の供給源があり、完結した生活が可能となる。こうした安定した生活環境を築くための方法として、風水説が展開されたと考えてよい。

確かに、生活が安定しものの生産が増えればそれは富に直結する。家門の繁栄と財力の強化は、それを実現し得る土地の選択にあった。殊に農耕社会においては、人々は土地に拘束される。土地の選択こそが幸運と富の基盤であった。地気あるいは龍脈は、その土地の地力を象徴する架空の存在ではあるが、景観や生産力、住民の利便性などの総合的な条件として考えれば、必ずしもすべてが想像上の存在とはいえない。

ただし、現在の風水説の多くは、風水説そのものを占いとして位置付けるために、地形や龍脈の存在を殊の外重視する。特に五行説に基づく気の流れを基礎に、独自に組み立てた理論によって占うから、たとえば西方は金気、その色は白。金気を生み出すもとは中央の土気、その色は黄色。従って、部屋や家屋の中央から西に向かう気の流通をよくしてお

けば、お金を得ることができる、あるいは西方からの金気を取り入れるようにすればお金がたまる、などということになる。実際にはもう少し複雑な理論になるようであるが、単純化すればこのようになる。しかしこれも、屋内の通気にかかわることで、生活環境を考えると、全く根拠がないとは言い切れない。考えてみれば、その程度の理屈に頼るのが占いであるから、あとは信仰の領域となる。

Ⅱ

ここでは、地気が凝集して強い地力をもつとされる風水上の良地について考えてみよう。その形状・地勢の大概については既に記したが、例えば『葬書』では、「土は高く水深くして、鬱草茂林なれば、貴きこと千乗の如く、富は萬金の如し」といい、穴をとりまく山はあくまで土の山であって、岩山であってはならない。しかも水流は浅くなく、深いのを可とする。周囲の森林は鬱惣とした深い樹林と草とに覆われる。そのような地こそきわめて高貴な地といえる。岩石を忌むのは、「土は気の体、土あらばここに気あり、気は水の母にして、気あればここに水あり」という。土は気の本体、気は水を生むというのである。さらに、「上地の山は、伏せるがごとく連なるがごとく、その原（みなもと）は天よりして、水の波の如く、馬の馳せるがごとし」とある。最上の山は、峻険な山ではなく、なだらかな山容をもち、幾重にも重なり連なり、波のように馳せる馬のように流麗な姿をもつ。『葬書』は、墓地選定の書ではあるが、生気旺溢した地を最上とするから、これはそのまま宅地や都市の選択にも通ずる。これらの記事からみると、土の山であり森林を持つこと。岩山であってはならない。山の形はなだらかな姿をもち幾重にも重なり、連なる姿をもつこと。こうした山が穴をとりまき局を形成する。土にこだわるのは、深い樹林や草叢を想定したためであろう。それは山の持つ保水力とも関わる。渇水期にも豊かな水流を維持できることは、生活や農耕にとっても不可欠の要素である。なだらかな山容と重なり合った奥深さを持つ山の、保水力と関わる。急峻な孤峯では、降った雨はそのまま流れ去るが、重なり合った峯を持つ山は、いくつもの谷を形成して水を保つ。

こうなると、風水とはいうものの、水にかなりの力点が注がれていることが分かる。実際、『葬書』に「風水の法は水を得るを上となし、風を蔵することこれに次ぐ」という。風は気の体であるから、気よりも水を重視したことがこれでもわかる。ただ、「それ陰陽の気は噫して風となり、升りて雲となり、降りて雨となり、地中に行きて生気となる」というのは、水もまた気より生じて気に帰る循環の図式を述べたもので、原理の提示として理解すべきものであろう。そして、より重要なことは、気の様態を風として解釈するところにある。それは、地中の気の流行ではなく地表の気の流通を重視したもの、理論的には地気の流通を求めながらも、実際には風を観ていたことになる。しかし風を観たといっても、風を求めたのではなく、風を避けることを目的とした。同じく『葬書』には、「気は風に乗じて散じ、界水（速い水の流れ）なれば則ち止む」といい、その注に、「経に云う、明堂は水を惜しむこと血を惜しむが如く、堂裏に風を避けること賊を避けるが如し」とある。明

堂とは穴のこと。要するに、気は風によって散佚するからこれを避けよというのである。北・東・西に山や丘陵を配するのは、風を蔵して気の散亡を防ぐためである。南に水を配するのは、風は水によって止まるからこれを越えない。理論として気の散佚を防ぐというものの実は風そのものの防御にある。その際、森林は防風林の作用をもつし、山は風そのものを防ぐと考えられた。北に高い山を想定するのは、おそらく北からの寒風を防ぐためであろう。南の水流・水沢も、夏の熱気の冷却と考えればよい。ただし、山越えの風の峻烈さを考えると、幾重にも重なった山並みと森林による強風の弱化が期待された。

局のもつ作用は、このように文字通り風と水の調和にある。風水説の初期に、地形・地勢を重視した所以はここにあるといえる。生活のための自然の確保と災害の防止、もう一つ加えれば肥沃な地味。良好な生活環境をこのように想定したわけである。地気の測定がどのように発生したのかはよくわからない。しかし、測定の機器としての羅盤が、磁石（コンパス）を中心に構成されていることは、その地のもつ四季の風向と大きな関係があるように思われる。直接の防風対策ではなくとも、気の散亡を防ぐ目的ということになれば、風向きは極めて重要な要件となる。

結局、風水説上の良地とは、現実的には、地気の流行とは関わりなく、上記したような諸条件を備えた地ということになる。そこで、こうした土地を探すことから発展して、良地を築くという発想が現われる。具体的には植林、造林、水路の開削などであるが、これらは比較的小規模な局に対応した。個人の宅地や数軒の集落を容れる局なら造成可能であろう。新たに造成された良地でも、数十年を経れば、もとからそうであったような外観となる。当然それは正真の良地と同様の機能を持つことになろう。

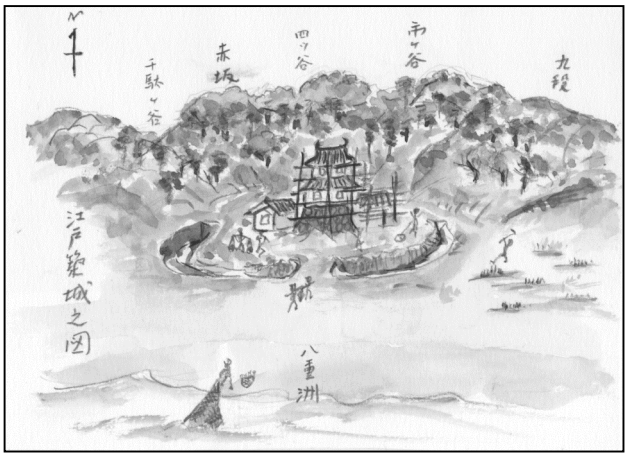
地気・龍脈という思想は、こうした良地のもつ地力の根源である。天然であれ人工であれ、同じ地力をもつことは、同じ龍脈を得ることになる。ところで、風・水・山・森林というタームを並べていくと、そこには環境論すなわちエコロジーという概念が当然ながら現われる。エコロジーそのものは、生態学と訳されて専ら環境と生物の相関性を追求してきたが、現在では環境保全や環境の復元などの分野を含むようになっている。森林環境学や海洋環境学といった、個別化された分野も存在する。その観点からみれば、風水説の中には山岳環境学や森林環境学、それに水系環境学と都市環境学ないしは住宅環境学という多領域の分野が含まれる。ただし、それは住民にとっての利点、生活の快適性や利便性、それに経済性という面から発したために、広い地域にわたる環境論を意識していない。まして、部屋の中の家具の配置や壁の色となると、殆ど地域の環境にも関わらない。しかしながら、今日的には、家具の配置やカーテンの色による保温・保冷効果を期待することができるかも知れない。その面からいえば、風水説による環境論は、あくまで「風水」という局面において有効であって、広域的な環境や発展という側面は、必ずしも意識されていない。したがって、これを近代的な環境論として成立させるには、地形・地勢に即した都市環境論や利水工学、さらには生態系の維持・保全という認識を加えなければならない。

風水説が形成されてきたかつての中国は、その殆どが農耕社会であった。そのために風水上の良地の選択と農地とは密接に関わっている。それをそのまま現代社会の中にあてはめて、かつての農地に各種工場を建設しても、環境の破壊が起る可能性さえある。したがって、風水説を近代社会の中に生かすのは、単なる地形・地勢だけではなく、地域のもつ

環境システムをも考慮しなければなるまい。一時期話題となった香港における風水戦争—某銀行が風水説によって新社屋を建てたところ、対する国立銀行が刃物のようなビルを某銀行に向けて建築した—のような愚行を犯してはならない。環境はこの二つの銀行のためだけにあるのではない。

Ⅲ

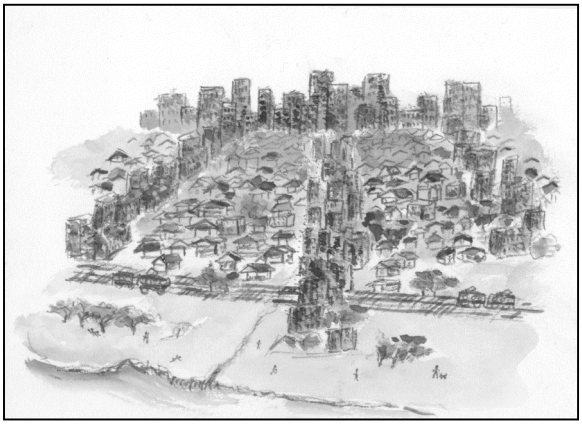
では、こうした風水説を現代の環境論の議論と結び付けた場合、どのような環境デザインが可能となるのか。二、三の事例を提示して、具体的なデザインのあり方を考えてみる。



風水説上の局の形態が、北側に幾重にも重なった山をもち、東西にも山や丘陵が配されて、いずれも深い森をもち、南に開けた土地と水流を想定することは既に述べたが、これを現代の都市に応用したとき、特に日本の大都市の場合、江戸時代に発展した海浜地域の都市が母体になったものが大半であって、ミクロ的には風水の良地と一致しない。マクロ的には脊梁山脈とその支峰を局の一部とする見方もあるが、これだとあまりに範囲が広くなって、風雨の影響を防いだりあるいはそれを利用する方途に欠ける。例えば関東地方の場合、鎌倉のように北・東・西いずれも山と森林に囲まれ、南に海が広がるような土地は、その規模といい景観といい稀な良地といえるであろう。逆に東京の場合、西に多摩丘陵が連なっていて、南に東京湾が配されるものの、北の主山が脊梁山脈となると、主山との距離がありすぎて、殆ど風水的効果はない。理想としては、東京北部・埼玉南部あたりに主山が欲しいところである。東には一応、国府台から連なる北総台地があるが、規模としては小さい。これは現在の状況を想定した解釈であるが、江戸初期から中期頃の状況を考えると、少し違った解釈がなりたつ。江戸城を中心に考えてみると、その北側は九段から市ヶ谷に及ぶ高台、東は白山から上野に至る台地。西は品川の御殿山。特に北から東にかけては、台地の間に幾つもの谷が形成され、それは現在も地名となって残る。一口坂・富士見坂・神楽坂・団子坂等々。南は築地あたりからの江戸湾。江戸城はこの局の中心、丁度穴に当る。太田道灌の頃までさかのぼれば、人家は少なく、周囲は森に囲まれた風水の適地であったといえる。東側の丘陵が少し心もとないが、それでも湯島から神田あたりまでは丘陵があり、その先が秋葉ヶ原。このように見ると、現在の東京は、その良地たる局をつぶして発展した。

太田道灌は室町時代中頃の人。築城の名人と伝えられる。武人ながら学問を好み歌人としても名を残す。そうなると、風水説や中国の地相術の知識は備えていたかも知れない。

道灌築城の遺構は、現在の皇居内にある道灌堀がそれである。規模として、現在の江戸城の外構よりかなり小さい。いまの東京駅の八重洲はその名の通り海岸であった。これから汐留・浜松町・品川を結ぶ線が江戸の浜になる。確かに前は海、後ろはいくつもの谷をもった台地。江戸湾の埋立も、その台地や小山を崩して埋立てたのであるから、当時は相応の高さをもったものと考えてよい。防御という点からも優れた地であったといえる。北の主山の高さが気になるところであるが、当時は、いわゆる武蔵野の雑木林が広がっていたから、それを含めるとかなりの高さがあった。



さて、いまは影も形のなくなったこうした環境をどうデザインするのか。例えば、ヒート・アイランド現象を解消しようとするのであれば、大気の冷却装置である水と森を効率よく配置することにつきるし、大気の汚染を防ぐのであれば森と風、ただし、風に頼ると汚染を拡散することになるから、あくまで浄化を第一とする。いくつかのケースが想定されるが、都市はこうした問題を複合させながら展開する。どの問題に対応するにも、森林・樹林と水と風は不可欠の要素となろう。問題は、自然の調整力・浄化力には限界があるということである。あまりに広い局は殆ど何の効果ももたない。もう一つの問題は、都市を壊して新しく作り変えることは不可能であるということである。今ある都市を作り変えていくしかできない。だからといって、やみくもに公園や緑地を作ってもあまり効率のいい方法とは思えない。もちろん大小の緑地が多数存在すれば、ある程度の効果はあろう。もう少し組織的な対応を考えると、一つの提案を示すことができる。

まず、都市の内陸部に高層ビルを集めること。これが局の主山となる。しかし、ビルは金属やコンクリートのいわば岩山である。これを山にするには、全面にツタを這わす。こうなると一つのビルが一本の巨大な樹木となり、山ともなる。ツタは和ヅタよりも常緑の西洋ヅタにする。ビルの高さは高低とりまぜて、均一にしない。こうしたビルを数十メートルごとに建て、十分な深縦性をとる。さらにビルとビルの間には、緑地を設けビル風の防風林とする。また、海浜側から主山方向に数本のグリーンベルトを設けて都市を縦貫させる。このグリーンベルトは、幅数百メートルは必要であろう。これもビルごとツタを回して樹木に見立てる。要所要所には本物の緑地を設ける。つまり、グリーンベルトで都市を分割し、小さな局をいくつか作るわけである。老朽化した海浜部の高層ビルは逐次とり壊して、出来れば緑地化していく。少なくとも一定限度以上の高さの建物は建てない。これで海風が入り、グリーンベルトに沿って大気の流れが生じる。

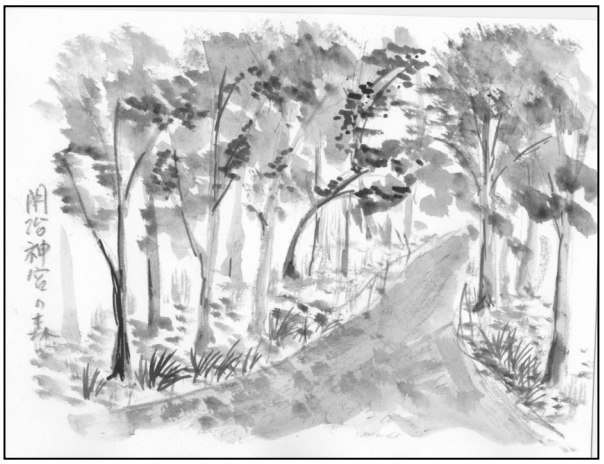
日本の都市の場合、大ていは水運の発展によって、川口付近に発展したから、水流についてはあまり問題はない。しかしながら、都市の河川は防災上殆どがコンクリートの護岸となっており、都市の台地に直接には作用していない。その一方、東京や大阪等の大都市では、かつての小河川が暗渠化されて、コンクリートのチューブの中を流れている。これ

を顕在化させて、水流を復元するのも一つの方法であろう。付近の大河川から水を引いて水流を復元することも可能であろう。

机上の空論に近い提案といわれればそれまでであるが、数十年かければ実現の可能性はある。何しろ山を造り森を造り、河川を復活させるのであるから、相応の時間が必要である。重要なことは、その数十年の間に石油文明は終わり、新しいエネルギーの時代になっていることである。その時、いままでの石油エネルギーを基本としたシステムは機能していない。

Ⅳ

風水説は、地気という架空の存在にもとづく思想であるが、すでに述べたように、森林と水と風と環境保全には不可欠の要素を重要視する。そして、この三つの要素は、現代の都市生活の中で最も望まれるものであり、都市の環境保全を考える上で、明らかに有効な作用をもつ。そのために、風水説の思想にもとづくいくつかのデザインを提示してみたが、この思想が形成されてきた時代と現代とでは、あらゆる基盤が異なり、都市のあり方も性格も全く異なっている。特に内燃機関による二酸化炭素ガスの排出など、500 年前には想像もできなかった事態が加わっていて、都市空間そのものが変質している。その中に、かつての風水説の思想をそのまま持ち込んでも、殆ど意味をなさない。しかしながら、風水説のもつ三つの要素は、環境の保全にとって不変の意義をもつ。そうであればなおさら、この三つの要素は、これからもその意義を失うことはない。



この稿では、風水説にもとづくいくつかの環境デザインを記してみたが、いずれも樹木と水と風のあり方によった。こうしたデザインが実現できるのか否かが問題であるのではなく、この三つの要素をどう生かすことができるのか、という問題の提示である。特に現代の都市の抱える問題の解決には不可欠の要素を、どのようにとり入れるのかという問題を、風水説によって構想してみた。一つ想起しなければならない事実は、都心に広がる広大な森林である明治神宮の森のことである。あの森は、明治神宮が起工された 1915 年から 5 年間にわたって、全国から集められた樹木を植えた人工の森である。八十年を経ると、人工の森の中には泉も湧き、小さな水流さえ生まれている。人工の森林も、年を経れば、一つの環境を構成し、生態のサイクルが備わることを示している。もちろん都心にある孤立した森林であること、人工的な植栽が行なわれたことから、自然林とは異なった生態系をもつことは否めないが、森林としての機能を備えることに変わりはない。

こうした都心の森林をできるだけ広く、そしてできるだけ多く作ることは、決して都心の環境を悪化させるものではない。緑地というと、住民に開放された公園をイメージする人が多いが、閉鎖され人の手を入れない緑地の造成も考えるべきであろう。廃校となった学校跡、老朽化した団地や集合住宅の跡、新しい施設を作るよりも安い経費と維持管理費、その上環境対策上も好ましい。都市の大規模な改造が不可能である以上、このような環境改造をくり返して、緑地・森林を増していくことも一つの方法といえる。

従来、都市のデザインの基本はその機能性にあった。土地を機能的に有効に使うことが都市デザインのあり方であったといえる。ところが、全く無機能的に見える空地や野原が、実は都市生活の中の潤滑油的存在であったことが知られるようになり、今度は人工的にそれを造ることが行なわれた。しかしそうなると、最初から機能性を期待して設計されたことになって、「無用の用」ではなくなる。むしろ何も造らず、手も施さず、空いた空間に自然のままの森林をいくつも育てていくことの方が、より好ましい。それは、神宮の森の現状を見れば明らかであろう。